

『グローバル天理』第11号（通巻35号）掲載論文要旨

井上昭夫 「「谷底」・アフガンに見る芥子栽培と地雷」

カブールテレビ放送では、子どもたちの教育番組で、地雷や爆薬が仕込まれたボールペンを示して注意を促している。パキスタンの首都イスラマバードからカブールへの国連機の座席の前のポケットには、対人地雷についてのことこまかな注意書き一枚だけが入れてあった。

荒川善廣 「「元の理」の探究（20）—神と世界 [3]」

親神は、この世をみずからの身体とされる一方で、精神性においてこの世を超越している。価値実現という観点からみると、可能的価値はすべて永遠の精神性(eternal mentality)としての神のうちにあるが、現実化された価値はこの世の出来事(events)となって神の身体に取り込まれる。世界が神の身体になるということは、個体的な自己実現を伴った多数の出来事を神が総合統一するということである。従って、神による救済の御業は、神の身体性(physicality)という場で遂行される。人間の真の救済は、この世を超える純粋な精神としての神ではなく、この世をみずからの身体とされている親神によってもたらされる。

宮田 元「宗教・スポーツ・教育（15）—宗教とスポーツ [13]」

今日、スポーツのあり方をめぐって、商業主義的要素が強まってきていることに危機感を感じる人や、スポーツ文化の楽しみ方をつくりだしていくことの大切さを指摘する人もある。スポーツを歴史的に眺めてみると、古代ギリシャのオリンピック競技にもみられるように、スポーツが宗教的な儀礼と深いかわりをもって始まり、発展したとみることができる。スポーツは、文化的、社会的な基盤の上に成り立っている。その点、時代の流れや社会の影響を強く受けていくものである。その意味では、スポーツ本来のあり方を見失わないためにも、伝統的に密接なかわりをもってきた宗教や教育と連携して、つねに人類世界の発展に向けて貢献していく道を歩んでいくべきものと思われる。

末延岑生「ことばと教育（20）—ことばの元を探る [20]」

報恩行動のための器官として筋肉がある。筋肉は自分の意志によって随意に調節できる横紋筋と、心臓の拍動や胃腸の運動のように、自分の意志によって調節できない心筋・内臓筋とがある。前者は体性神経(外部環境神経)を通じてからだのあらゆる部分の動作を思い通りに、自由用自在に操ることができる。また、心どおり、思い通りに発声し、ことばが話せ

るのはまさにこの筋肉の力である。至れり尽くせりの借り物のからだである。四肢についても言えることは、心どおりに使い、動かすことができるということである。手の場合、言語と手の関係については、「見える脳」ともいわれてきた。

随意筋を動かせる元となる不随意筋は、ひと時でもその働きが止まれば死に至る大切な筋肉であるにもかかわらず、人はあまりそのありがたさを理解していない。人間にとっては確かに不随意な筋肉であるが、それは親神の思し召しのままに動かされている“神の随意筋”と呼んでいいだろう。大脳辺縁系の視床下部がその中枢となって命令が営まれる自律神経系は“内臓脳”とも呼ばれ、体液性ホルモンの調節によって、ホメオスタシスが保たれている。自律神経と呼ばれる名称にしても同じことが言える。自律とはいえ実は親神が律している。ことばを自然に話すために、こうした王国の協働があつてはじめて不随筋を動かし、さらには随意筋を動かしているのである。こうした動きが、根深いところで、人の意思、心、そして言語と深いかかわりを持っていることは、火を見るより明らかである。このように、ことばの元はといえば当本人の心の思いであるが、それを可能にする土台となるのが“神の随意筋”たる不随意筋と、親神の律する自律神経系である。科学とは、このように理に添って自然を観察することを教えるものでなくてはならない。

佐藤浩司「天理教東南アジア伝道誌（16）―戦前のシンガポール伝道〔3〕」

板倉タカの熱烈な布教活動によって、多くの人が教えに導かれた。設立された新嘉坡教会には、月次祭には200人もの参拝者であふれたという。しかし、本格的な伝道はこれからというときに、板倉タカは出直すことになる。教会設立して4年目の大正15年5月4日、板倉タカ59歳であった。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（35）―文明について〔1〕」

今回は文明の問題について考えてみた。宗教が文明の中核である限り、宗教の対立は常に文明間衝突を招来する。現在喧伝されているイスラームと西欧キリスト教世界の対立もその深層には歴然と宗教的対立が存在しているのである。

小林正佳「芸術・癒し・宗教（34）―民俗舞踊再考」

癒しの場面にふさわしい踊りがあるはずだ。そんな一つの舞踊ジャンルとして、ここでは民俗舞踊の可能性に注目してきた。もちろん、民俗舞踊でなければならないというのではない。しかし、どんな踊りにせよ、自由に踊らせるというその自由さが、場面設定の自由さだけでは

なく動きそのものの自由なあり方として捉えられなければならないという点は、いくら強調してもし過ぎることはないと思う。

癒された身体を実現するには、そのモデルとなるような自由で開かれた身体が目の前で示されなければならない。その意味で、踊らされる側の身体のありようは、踊らせる側の身体のありようを映し出す形で実現されるだろう。この点でダンスセラピーは、踊りを通して一つの身体のあり方(同時に、それに相即する心のあり方)が誰かから誰かに伝えられる、一つの伝承行為といった側面をもっている。

その意味でわたしは、踊らされる側の条件に先立つ踊らせる側の身体のありように注目したいと思う。癒しを目指せばこそ、何より、踊らせる側の身体が開かれていなければならない。寛ぎの中にある自由な身体であってこそ、はじめて、踊らせられる側の身体にもそれと相似な体験を実現するだろう。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信 (25) ?臓器移植研究と政治規制 [2]」

カルフォルニア州は中央政府に挑戦するような形で胚性幹細胞研究を許可する法律を作った。人間の命が政争の具となった感じがする。ヒトの命の価値を考えると、医学の進歩を表に出しながらも人間としてはいささか後退の道を歩み始めたのではないだろうか。ただし、Bush 政府も胚性幹細胞研究を法的に禁止しているわけではなく政府の研究費を使わせないだけである。この点禁止していると錯覚しがちである。

特別掲載：第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム2002 (7) パネルディスカッション「天理ラグビーの真髄と人材育成」

本稿は、井上昭夫おやさと研究所長による、シンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」に関する総括の内容である。講演の内容、そしてパネル討論より導かれた諸見解に対し、それぞれ感想を述べながら、独自の見解を加えられた。「スポーツの本質や真髄」、「天理スポーツのあり方」「天理スポーツ学の視点」といった観点について、「スポーツの語源」や「元初まりの話」をベースとしながら、総論が展開されている。

堀内みどり 「天理異文化伝道 (33) 天理教のコンゴ伝道 [32] —多発する内戦」

ノソガが会長に就任したものの、現地では不協和音とも思える「一手一つ」を欠いた教会だった。1984年8月に3代所長が帰任し、4代所長が任命されたのは、1989年になってからだった。しかし、直後に現地を巡教した伝道部長は日本人の全員帰国を決定。コンゴ人だけの教会運営が始まるも、労働党支配の終わったコンゴでは、内戦が相次ぎ、国内は緊迫した情勢となった。